

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

アンダルシアに於けるアラブ音楽に関するノート(I) :
後ウマイヤ朝創設期の音楽文化

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1981-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/645

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



アンダルシアに於けるアラブ音楽に関するノート(I)

—後ウマイヤ朝創設期の音楽文化—

木 島 健 一

1. はじめに
2. 歴史的・文化的背景
3. アンダルシアのアラブ音楽
 - 3-1. 後ウマイヤ朝成立までのアラブ音楽概観
 - 3-2. 宮廷の音楽
4. おわりに

1. は じ め に

中世スペインは約800年にわたってムスリム (muslim イスラム教徒) の支配下にあり、その地はアル・アンダルス al-Andalus と呼ばれていた。すなわち、我々の言うアンダルシアである。筆者の最終的な目的は、このアンダルシアにおけるアラブ音楽文化を歴史的に捉える事にある。つまりアラブ音楽が、主としてイベリア半島に土着の音楽的文化要素との相互的な影響の下で、どのように変容し、あるいは独自性を保ち得たのかを探り、それを通じてアンダルシアのアラブ音楽文化の特徴を明らかにする事が筆者の目指すものである。本稿は、ささやかではあるが、この長期的な目的に沿って書かれたノートである。

さて、本稿で取り扱う時代は、西暦756年から822年までとする。因に756年は、アブド・アル・ラフマーン1世 'Abd al-Raḥmān I (在位756—88年) によってイベリア半島に後ウマイヤ朝が建てられた年である。また822年に一つの区切りを設けたのは、後にアンダルシアを代表する音楽家となったジルヤブ Ziriyāb (850年頃歿) がアンダルシアの地で華々しい活躍を見せたのが、822年以降のアブド・アル・ラフマーン2世 'Abd al-Raḥmān II (在位822—52年) の治世においてであり、ジルヤブとその影響を受けた音楽家達の活動は確実に一つの時代を画定できるからである。ジルヤブはウード ('ūd) に改良を加えた事でも著名であるが、音楽文化に対するジルヤブの貢献のうち最も重要なのは、彼が伝統的なアラブ音楽をアンダルシアに紹介し、さらに自分の音楽学校を通じてそれをこの地に定着させて以後のアンダルシアにおけるアラブ音楽に決定的とも言える影響を与えた事にある。ジルヤブはまた他の諸学問にも精通した教養人であったが、マシュリク (Mashriq 東方イスラム世界) の文化上の様々な趣向 (dhawq) をアンダルシアに伝え普及させた点でも見逃せない人物である。イブン・ハルド

ゥーン Ibn Khaldūn (1332—1406年) は、その不朽の名著『歴史序説 al - Muqaddima』において、ジルヤーブを評して次のように言っている。

「ズィルヤーブがスペインに残した音楽の遺産は、群小諸侯の時代にまで伝えられ、セビリャで非常に発達した。セビリャでの隆盛が衰えると、その歌謡技能はイフリーキヤやマグリブの海岸地帯に移植され、諸都市に広がった。ここでは、この地方の文明の衰退や王朝の弱体化にもかかわらず、いまなおその跡をとどめている」。(注1) [イフリーキヤ Ifrīqiya はチュニジア地方を、マグリブ Maghrib はアルジェリア、モロッコ地方を指す。]

ともあれ、ジルヤーブとその周辺の音楽家については稿を新たにしておく予定である。

なお、アラブがイベリア半島を征服してからアブド・アル・ラフマーン1世による後ウマイヤ朝の創設までの時期(711—56年)の音楽に関しては、アラブ側の資料が特に少なく本稿では扱わない。スペインにおけるアラブ文化の研究者リベラ J. Ribera は、「ウマイヤ家以前の音楽については、アラブの歴史家は一言も言及してくれていないが、土着の民の音楽か、以前にスペインを支配した芸術的な民族の音楽であったと思われる」(注2)と述べている。しかるに、英国のアラブ音楽史の大家ファーマー H. G. Farmer は、その『アラビア音楽史』において、この時期に関して唯一人の音楽家の名前をも挙げていない。何れにせよ、アンダルシアのアラブ音楽におけるこの言わば空白の40余年を埋める作業が急がれる。

最後に、本稿で引用並びに参照した主なアラビア語原典について、ごく簡単に紹介しておく。

1. アル・イスバハーニー著『歌の書』/al - Iṣbahānī : Kitāb al - aghānī

作者のアル・イスバハーニー(897—967年)は東方イスラム世界を代表するアラブ文学者の一人であるが、彼は半世紀にわたってその情熱をこの『歌の書』の執筆に傾けたと言われている。『歌の書』はアラブの詩歌や音楽を中心に据えてはいるが、それらの作者や奏者等にまつわる無数の逸話を織り込みつつ当時の社会生活までも我々に生き生きと語りかけてくれる。それは6世紀後半から9世紀末までのアラブ文明の一大集成の書であり、アラブ文学史上における輝かしい金字塔である。本稿で利用したのは1927年以来現在も継続して刊行中のカイロ版であり、これは1974年の時点で24巻まで出版されている。なお、ブーラーク版に当たる事はできなかったが、ギディ I. Guidi による Index は随時参照した。

2. アル・マッカリー著『柔らかきアンダルシアの木枝より来る芳香の息吹きと、その宰相リサーン・アル・ディーン・イブン・アル・ハティーフの追憶』/al-Maqqari : Kitāb nafḥ al-ṭib min ghuṣn al-Andalus al-raṭīb wa dhikr wazīrihā Lisān al-Dīn ibn al-Khaṭīb

アル・マッカリー(1591年頃—1632年)はアルジェリアのトレムセンに生れ、学者としても名を成した文人である。彼の主著『柔らかきアンダルシアの木枝』は、とりわけアンダルシアの文学史やグラナダのナスル朝(1232—1492年)の研究を志す者にとり欠く事のできない資料の一つである。『柔らかきアンダルシアの木枝』は大きく2部に分かれ、第1部でアンダルシ

アの歴史と文化史が扱われているが、音楽文化に特に密接な関わりを持つのは第1部の5章と6章である。刊本にはライデン版、ブーラク版及びカイロの10巻本等がある。本稿で主に用いたのはライデン版であるが、カイロの10巻本も併せて参照した。なお本書については、『イスラム世界』の第4号に前嶋信次氏による紹介がある。(注3)

2. 歴史的・文化的背景

アンダルシアに後ウマイヤ朝を興したのは、アブド・アル・ラフマーン1世であるが、その関連上、東方においてウマイヤ朝が滅亡しアッバース朝が成立するまでの経過から話を進める事にする。

8世紀も中葉になると、イスラム世界は大きな転換期を迎える事になった。マシュリク（東方イスラム世界）では、661年にムアーウィヤ1世 **Mu'awiya I** が建国して以来、シリアのダマスカスを首都としてイスラム世界に君臨したウマイヤ朝が存亡の危機に直面していた。イラクのクーファに本拠を置いて地下活動に専念していたアッバース家運動が、747年にウマイヤ朝の東北辺境ホラーサーンにおいて遂に武装蜂起に踏み切り、今や公然とウマイヤ朝に敵対する勢力となったからであった。そして早くも2年後の749年には、アブー・アル・アッバース **Abū al-'Abbās** がアッバース朝の初代カリフに就く事が宣言されるまでに至った。その勢いの前には、ウマイヤ朝第14代カリフマルワーン2世 **Marwān II** の抵抗も虚しかった。このウマイヤ朝最後のカリフは、逃亡の途中エジプトであえない最後を遂げ（750年）、90年に及んだウマイヤ家の支配はここにその幕を閉じたのである。

政権を握ったアッバース朝は、ウマイヤ家の血の復讐を恐れて、その縁りの者を根絶やしにしようと努めた。多くの者が奸計に落ち入って殺され、アッバース朝の執拗な追及を何とか逃れ得た者は少数であった。アンダルシアの地にウマイヤ家を再興したアブド・アル・ラフマーンは、その少数者の中の一人であった。アブド・アル・ラフマーンの父はウマイヤ朝第10代カリフヒシャーム **Hishām** の息子ムアーウィヤ **Mu'awiya** であり、ベルベル人のウム・アル・ワラド (**umm al-walad** 主人の子を産んだ女奴隷) がその母であった。アッバース朝の追手を逃がれ、イラク、シリアを経て北アフリカへと当て所もない放浪の旅に出たアブド・アル・ラフマーンは、何処においても招かれざる客であった。しかし、彼の逃亡の旅もその終りを迎える時がやって来る。それは、故郷のシリアから遙か離れてはいるものの、彼の地に風土・景観がよく似ていた西方辺境のアンダルシアにおいてであった。若きアブド・アル・ラフマーンは、ウマイヤ家の遺臣が多く支持が得られそうなアンダルシアに命運を賭け、その賭けは見事に成功したのである。ジブラルタル海峡を渡りイベリア半島の地を踏んだアブド・アル・ラフマーンは、首尾よくアッバース朝の総督を打破り長年の放浪に終止符を打った。756年に首都コルドバに入城したアブド・アル・ラフマーンは、アンダルシアのアミール（君主）である事を宣言し、ここに1031年まで続く後ウマイヤ朝が成立したのである。

アブド・アル・ラフマーン1世（在位756—88年）の治世は30年以上にも及んだが、その生

涯はアミールの地位を安定させ新たな王朝の礎を築くのに忙しかった。アラブの内部では鋭い対立があり、ベルベル人やイベリア半島の土着民は叛乱を繰り返していた。それに加えて、キリスト教国との抗争も悩みの種であり、その基盤は絶えず揺れ動いていた。しかるに、10世紀の後半に首都コルドバは50万を下らない人口を有し、紛れもなく当時の第一級の都市としてその文化を誇っていた。同時代でこれに比肩できる都市と言え、イスラム世界では東方のバグダード、キリスト教世界ではコンスタンティノープルだけであった。この王朝のこのような繁栄を、アブド・アル・ラフマーン1世の時代に一体誰が予測できたであろう。ともあれ、異郷の地アンダルシアにおいて年を重ねるにつれ、この異邦人アブド・アル・ラフマーンの胸中には、アッバース朝に対する尽きる事のない怨みと故郷のシリアを想う望郷の念が募るばかりであった。アブド・アル・ラフマーン1世は、祖父のウマイヤ朝カリフ・ヒシャームがシリアで営んだ離宮アル・ルサーファをコルドバ近郊の自らの宮殿の名前として往時を偲び、我が身の境遇を^{なつめやし}棗椰子に託して次の詩行を詠んだと言われている。

故国を去りて遠く西方の地アッ・ルサーファに、
宙天たかく聳え立つただひともの棗椰子あり。
そはいとし子やはらからに別れを告げて幾年月、
流謫の身にて懷郷のおもいつきせぬ吾がすがた。(注4)

さて、788年にアブド・アル・ラフマーン1世の後を継いで第2代目のアミールに即位したのは、息子のヒシャーム1世 Hishām I (在位788—96年)であった。ヒシャームはアミール位を巡る兄弟達との継承争いに勝利を収めたものの、その治世は短かく7年余に過ぎなかった。彼の治世においても、国情は絶えず不安定で叛乱が日常化していた。ヒシャーム1世は敬虔なムスリム(イスラム教徒)であり、父のアブド・アル・ラフマーン1世に倣ってコルドバの大モスクを拡張し、ミナレット(manāra)を建立した。

次に第3代目のアミールとして登場したのが、アル・ハカム1世 al-Ḥakam I (在位796—822年)であった。彼は26才の若さで父ヒシャームの後を継いだ。彼の長い治世も祖父や父の時代と同様に、絶え間ない叛乱やキリスト教国との対立が続いた。アミールの権威の確立を目指したアル・ハカム1世は、時に強行な手段に訴えたが、それらは「掘割りの日」の事件や「郊外の叛乱」として人々の脳裏に強く焼き付けられる事となった。そして最終的には、彼の目指したものは相当程度に達せられたようである。

ヒシャーム1世からアル・ハカム1世にかけての時代は、アンダルシアにおけるイスラム法学の流れに多大な影響を与えている。イスラム法はシャリーア(sharī'a)と呼ばれ、イスラム教徒にとって信仰上のみならず実生活の行動をも律する規範である。預言者マホメット(ムハンマド) Muḥammad の死後、このシャリーアの解釈を巡って様々な学説が流布されるに至った。しかし9世紀の半ば頃までには、シャーフイー Shafī'i 派等の4つの主要な法学派(madhhab)をも含む代表的な法学派が形成された。アンダルシアにおいて重要な役割を担ったのは、この4つの主要な法学派の中で特にアラブ的な性格の強いマーリキー Mālikī 派であ

った。英国のイスラム学の権威ワット W. M. Watt は、さらに十分な検討を要すると断わりながらも、「一般にスペインのムスリムは、当初シリアの法学者アル・アウザーイーの教義に従い、その後800年頃から公式的にマリーキー派を採用するようになったとされている」(註5)と概括している。

ここアンダルシアにおいては、人種的な多様さが常に大きな問題であった。この事は社会的、経済的な格差とも結びついて、相次ぐ社会不安を引き起こした。主要なムスリム(イスラム教徒)集団として、征服者のアラブ(彼等は、人数の点では少数であった)やベルベル人に加えて、イベリア半島土着の改宗者が存在した。イベリア系の改宗者は、ムサーリム(musālim 和解する者)と呼ばれた。ムサーリムの子孫の生まれながらのムスリムはムワッラド(muwa'llad ムスリムとされた者)と言われたが、彼等がムスリムの中に占める割合は、時が経つにつれて次第に大きくなっていった。そのために、「血筋を語るさいには男系だけが問題とされたが、生粋のアラブ人はイベリアの女性と自由に結婚しており、その結果10世紀の時点では、アラブとムワッラド間の明確な人種的区別はなくなっていた」(註6)のである。キリスト教徒としての信仰を維持した者も少なくなかったが、キリスト教徒でありながらアラブの文化に強く魅せられた人々も大勢いた。後者はモサラベ(mozárabe)と呼ばれたが、アラビア語のムスタァリブ(musta'rib アラブ化した者)が訛ったものであり、この言葉自体が彼等の生活態度・様式をよく示している。その結果、711年のアラブのイベリア半島への侵攻以来3、4世代を経た時点では、アンダルシアではアラビア語とロマンス語方言が併用されたようである。(註7)

都市にはユダヤ人もいた。ユダヤ人達は、アラブ征服以前の西ゴート王国時代には宗教的にも社会的にも抑圧されていたが、ムスリム支配下のこの時代には概ね自由で平和な生活を営んだようである。その他の集団としては、黒人奴隷やスラブ系の白人奴隷サカーリバ(ṣaḡālība)が知られているが、特に後者がアンダルシアの社会で重要な役割を担うようになるのは、10世紀のアブド・アル・ラフマーン3世 'Abd al-Raḥmān III (在位912—61年)の治世以降である。

これまで観てきたように、アブド・アル・ラフマーン1世以来の後ウマイヤ朝の創設期にあっては、アミールの権威自体が確立しておらず、政情は絶えず不安定であった。また東方のアッバース朝との政治的関係は、当然の事ながら敵対的であった。しかしその一方では、東方に対する強烈的な郷愁や志向が存在した。人々は巡礼のために東方の聖地を訪れ、学問に携わる者も東方の学者の許で学び、また東方での様々な趣向がアンダルシアで尊重されたのである。このように、政治上は別にして、文化的・経済的な面でアンダルシアと東方イスラム世界のコンタクトが跡切れる事はなく、大体において密接な関係が保たれたのである。

3. アンダルシアのアラブ音楽

言うまでもない事であるが、後ウマイヤ朝以降のアンダルシアのアラブ音楽理解のためには、それ以前のアラブ音楽の知識を欠く事はできない。そこで本節では、最初に「後ウマイヤ

朝成立までのアラブ音楽概観」の項を設け、歌を中心にアラブ音楽の流れを整理してみた。次の「宮廷の音楽」の項では、宮廷を中心としてアンダルシアのアラブ音楽を扱った。なお、都合により本稿では、‘民衆レヴェルの音楽’に関しては触れていない。

3—1. 後ウマイヤ朝成立までのアラブ音楽概観

古代のアラブにあっても、他の民族と同様に、歌あるいは音楽において主導的な役割を果たしたのは女性達であった。女性達の活躍は、イスラム誕生以前のジャーヒリーヤ *Jahiliya* 時代（歴史的用語としては5世紀の中葉から7世紀の初めまでを指す）にまで遡る事が可能である。ジャーヒリーヤ時代のアラブは土着の歌を有し、それに加えて外来の歌の影響を受けていた。土着の歌は、未だ歌と踊り、あるいは歌と詩が明確に区別されないで半ば一体となっていたが、^(注8) アラブの日常生活や社会生活と深く結びついていた。それらは喜びや悲しみの歌、あるいは戦いの歌、また日常の作業歌や巡礼の歌として具体的には表わされた。もちろん男性もこれらの歌に関わりを持ったが、土着の歌を主として表出したのは職業的でない一般の女性達であった。一例として、ダージナ *dajina* あるいはムドジナ *mudjina*（共に、曇らせる者の意）と呼ばれた女性達の場合を挙げてみよう。フェーマーは『アラビア音楽史』において、「ダージナは、雨を呪文で呼び出すために、空が雲でおおわれた時に歌い踊るのが習慣であった」^(注9)と言及している。この事から、ダージナの歌は歌と踊りが不可分の段階で、アラブの日常生活と深く結びついた役割（この場合は、雨乞いという呪術師的役割）を担っていた事がわかる。さて、アラブ土着の歌の中でも特に重要な位置を占めるのが、泣き歌の系統である。アラブにも古くから泣き歌 (*bukā'*) があり、それが徐々に洗練されて悲歌 (*nauh*) にまで発展をみた。そして、この悲歌を歌う女性達のうちで特に秀でた者が、ナーイハ (*nā'iha*) として次第に職業化していったのである。因に、悲歌は時代が下るにつれてその重要性を増し、ウマイヤ朝（661—750年）の初期には、悲歌に習熟する事が歌手として不可欠の条件と見なされる程であった。

ジャーヒリーヤ時代における、もう一つの歌の流れは外来のものである。一般に、外来の歌は北方系と南方系のものに分けられる。南方系に属するのはネグロ系、アビシニア系の黒人奴隷の歌であるが、その影響の度合は北方系に比べると著しく低い。一方、北方系すなわちペルシアやビザンチン等の当時の先進地域からの影響は非常に大きかった。これらの国々からは職業的女性歌手のカイナ (*qaina*) 達が連れて来られたが、彼女達のほとんどは、身分的には奴隷もしくは半奴隷であった。カイナ達は自らの母国語で歌を唱い、異国的な風情でアラブの民を魅了したが、その歌はアラブの土着の歌が生活と切り離せない段階にある時に、鑑賞に耐え得るものとして大きな歓びを与えていた。彼女達は、ジャーヒリーヤ時代の詩人の詩にも度々詠み込まれ、アラブ文学史に華かな彩りを添えている。カイナ達がもたらした鑑賞に耐え得る歌は、土着の歌に深い影響を与えそれを高める役割を果たしたが、それと共にカイナ自身のアラブ化も促進される事となった。その結果、ウマイヤ朝の初期には、カイナとナーイハは概ね同義となり、女性の職業歌手の意で用いられた。

しかしながら、ジャーヒリーヤ以来の女性歌手達の活躍も、7世紀初めのイスラムの出現とその影響のため、一時的にはあるが中断されてしまう事になる。それは、イスラムの教え自体と言うより預言者マホメットの個人的な性向が主たる原因であったが、イスラムの下では詩や歌は好ましいものではなく、むしろ禁忌の対象とさえ考えられたからである。しかし、歌や音楽は人間の自然的欲求の為せる業であり、抑えようとしても抑えきれものではない。その証拠に、フダー (ḥudā' キャラバンソング) 等の生活に密着した歌は、この時代にも以前と変わる事なく見い出されたのである。そして、早くも正統カリフ第3代のウスマーン 'Uthmān (在位644—56年) の時代には、歌の復権の兆しが見られ、それ以降女性の職業歌手達は公然と活躍するに至ったのである。加えて、「歌謡の復権はまず禁忌とされる宗教そのものの中にもぐり込んで出てくる。すなわち宗教という全体的枠組の中で新たな機能をもって誕生してくる文化要素の中に隠されて養われることになる」^(注10) のは注目すべきである。キラア (qirā'a 聖典『コーラン』の読誦) やアザーン (adhān 礼拝への呼びかけ) は、この延長線上で把えなければならないであろう。^(注11)

この事態と並行して、重大な変化が現われてきた。それは男性の職業歌手の登場である。しかし今まで述べてきた通り、歌の世界は女性の領分であった。男性がこの未開拓の分野に入り込むには、女装し女性の風俗習慣を身につける事が必要とされた。こうして登場したのが、ムハンナス (mukhannath) と呼ばれる女形の男性歌手の一团であった。そして、このムハンナスを一つの契機として、いよいよ真の男性職業歌手が、7世紀の後半から8世紀の初めにかけてアラブ世界に出現する事になる。この結果、ジャーヒリーヤ時代からウマイヤ朝の初期まで続いた歌の分野における女性優位の時代は、男性の職業歌手の登場によってその終りを迎えた。ともあれ、ウマイヤ朝の宮廷には男性や女性の歌手を中心とした音楽家達が集められ、その宮廷生活を華やかなものとした。また音楽家の地位も以前よりは向上し、もはや奴隷や半奴隷だけの職業ではなく、血筋正しいアラブの中にも音楽に携わる者が現われてきた。音楽家の活躍の場は、宮廷を初めとして貴人や金持のサロンであり、音楽家は私的な祝事やイスラムに関連した祭りにも欠かせない存在であった。この様に、歌を中心として隆盛の時代を迎えたアラブ音楽は、東方ではアッバース朝 (750—1258年) に、またアンダルシアにおいては後ウマイヤ朝 (756—1031年) に引き継がれ、一層の発展を遂げるのである。

3—2. 宮廷の音楽

756年、アブド・アル・ラフマーン1世 (在位756—88年) は、アンダルシアの地に後ウマイヤ朝を建てる事に成功した。彼の治世は33年間にも及んだが、アラブ内部の対立に加えてベルベル人やイベリア半島土着民の叛乱に絶えず悩まされ、外にはキリスト教国との戦いを抱え、平穏な日々が彼を訪れる事は極めてまれであった。しかしシリアで育ち、文化や芸術の面において東方の洗練された趣向 (dhauq) を身につけていたアブド・アル・ラフマーンが、祖先のウマイヤ朝カリフ達と同じ様に、宮廷でのしょうやかな気晴らしに一時の慰めを求めたとしても不思議ではなかった。マシュリク (東方イスラム世界) からアンダルシアに赴いた文化人が

歓迎され、東方へも人が遣わされて宮廷生活を彩る人物が求められた。その中には音楽家も含まれていたが、アブド・アル・ラフマーン1世に任えた音楽家のうち筆者が文献上で確認できたのは、女性歌手のアジュファーウ 'Ajfa' のみであった。因に、ファーマーの『アラビア音楽史』では、アジュファーウはアフザー 'Afza' という名前で扱われており、アブド・アル・ラフマーン1世のお気に入りの女性歌手で、ウードを伴奏に歌ったと述べられている。(註12) またリベラの『古代アラビアとスペインにおける音楽』によれば、アジュファーウはウードの名手で、そのために東方から連れて来られたとの事である。(註13) 以下、アル・イスバハーニーの『歌の書』からの引用により、アジュファーウに関するエピソードを紹介する。なお、アル・マッカリーの『柔らかきアンダルシアの木枝』にも同じエピソードが扱われているが、(註14) 併せて参照した。

「……………グライル・イブン・タルハ・アル・アルカミー Ghurair ibn Ṭalḥa al - Arqamī^(註15) は次の様に語った。アブー・アル・サーイブ・アル・マフズーミー Abū al-Sā'ib al-Makh-zūmī は、有徳かつ敬虔の士であったが、私に尋ねて言った。“君は、歌 (ghinā') において最も秀でた人物と知り合いになりたくはないかね”。“言うまでもない事だよ” と私は答えた。ところで、私はその当時ペルシャマント (ṭailasān) を持っていて身に着けていたが、そのマントが余りに粗雑で重い事から、私はそのマントを “ムカッティウ・アル・アズラール” (muqattī' al-azrār 剣の刃をもぼろぼろにするもの) と名付けていた。そして私達は出かけ、ジャッバーナ (Jabbāna)^(註16) 地区にあるムスリム・イブン・ヤフヤー Muslim ibn Yaḥyā の邸宅 (dār) までやって来た。彼は、酒売りで吃り (aratt) であった。そしてズフラ家 Banū Zuhra の使用人 (maulā) であった。イブン・ヤフヤーは私達の誘い（一杯一緒にやらないか、の意か）を聞き入れてくれ、私達は邸宅 (bait) の中に入った。家の大きさは、おおよそ12腕尺 (dhirā' 腕尺とは、時代と場所で異なるが大体18—22インチである) であった。また、その天蓋における高さは16腕尺であった。邸の中にある目ぼしい物と言え、クッション (numruqa) が2つあるだけであった。しかも、クッションの横糸 (luḥma) はすっかり無くなって、縦糸 (sadā) だけが残っていた。そして、クッションには靱皮繊維 (lif)^(註17) が詰め込まれていた。2つの椅子は木製であったが、その古さのために塗料が尽く剥げ落ちてしまっていた。椅子の間には、靱皮繊維を詰め込んだ肘掛け台 (mirfaqa) が2つあった。その時、一人の老婆 ('ajūz) が私達の前に姿を現わした。老婆には雀斑^{そばかす}があり (kalfā') 瘦細って ('ajfā') いた。その髪は、まるで死人の髪の様（白髪である事を言っている）であった。老婆は、洗い古して黄色に変色したヘラート (Hara' ホラーサーン地方にある町の名) 産の袖なしガウン (qarqal) を羽織っていた。また彼女の両の腿^{もも} (wark) は、臀部の薄さ (rasaḥ) のために、彼女が腰を下すまでは恰も1本の細紐 (khait) が続いているかの様であった。そこで、私はアブー・アル・サーイブに尋ねた。“私の父と母に誓って言うが、一体この女は何者なのかね”。アブー・アル・サーイブは答えて言った。“そんな事を言わずに、（彼女の歌を）聞いてみたまえよ” と。老婆はウード ('ūd) を手に取って奏し始め

た。そして次の通りに歌った。

グライル Ghurair (つまりこの逸話を伝えている本人) は言った。"アッラーに誓って。私の見る所、歌は素晴らしい出来映えだ。それには清純さ (naqā') と純粹さ (ṣafā') が現われている"。女の顔からは、雀斑 (kalaf) が消え失せてしまった。アブー・アル・サーイブは (感情を高ぶらせて) 身を前に乗り出したが、私も彼と同様であった。そこで、女はまた歌い始めた。

その歌唱 (ghinā') は非常に調和がとれており、中指 (wustā) のラマル (ramal 速く歩く速度) 調で、ヒシャーム Hishām^(注18) により伝えられた歌であった。

アブー・アル・サーイブは言った。"もしもこの歌を咎める者があるとすれば、その者は自分の母親の陰核 (baḡr) を噛む事になろう"。(つまり、女の歌が余りにも見事なため、それを誇ったりすれば罰が当たるとの意である。時代や地域を問わず、母親を侮辱する事が相手をいかに傷つけるかは言うまでもない。) 彼は (浮かれて) さらに身を乗り出したが、私も彼と同じであった。その結果、私は (歌い手の) クッションに近づいた。その女アジュファーウ 'Ajfā' (ほっそりした、すらっとしたの意) は、私の目には大きく見えた。それはまるで、皮袋 (qirba) の水によって粥 (sawīq) が老人を育むかのようであった。(平生どんなにつまらなく小さく見える人物でも、一旦自らの能力や技量が活かせる場合には、大きく偉大に輝いて見える事を言っているのであろう。) そして、アジュファーウは再び歌った。

その歌は、アル・ガリード al-Gharīd^(注19) によって作曲されたものであった。それは、中指 (wustā) のマジュラー (majrā) におけるサキール・アウワル (thaqīl auwal) 調であった。アル・ガリードには別の作曲法があり、薬指 (binṣīr)^(注20) のマジュラーにおける同時開放弦 (itlāq al-watar) のサキール調であったが、それはイスハーク Ishāq^(注21) により伝えられた。

グライルは語った。そこで、私は自分のペルシャマントを地面に脱ぎ捨てて、寝床の上掛けを手を取った。私は自分の頭の上にその上掛けを置いた。私は大声で次のように叫んだが、それはまるでメディナ (al-Madīna サウディアラビアの都市名) において [インゲン豆の豆売りが]^(注22) 大声で呼ばわっているかのようであった。"1ナワー (nawā ディルハム銀貨5枚の重さ) でキビ (dukhn) 1本だよ"。アブー・アル・サーイブは立ち上がって、1つの箱 (rab'a) を手を取った。その箱はたまたまその邸にあったのであるが、その中には香油 (duhn) のガラス瓶 (qawārīr qārūra の複数) が幾つも入っていた。彼は、その箱を自分の頭の上に乘せた。その時、歌姫 (jāriya)^(注23) の主人のイブン・アル・アラット Ibn al-Aratt (吃りの息子の意で、ムスリム・イブン・ヤフヤーを指している) が次のように大声で叫んだが、子音 ra' の発音違い (althagh) を犯してしまった。つまりイブン・アル・アラ

ットは、“カワーリーリー，カワーリーリー (qawālīlī qawālīlī)” と言ってしまった。然るに彼は、“私のガラス瓶よ，私のガラス瓶よ (qawārīrī qawārīrī)。(香油のガラス瓶が入っているのだから) 後生だから(止してくれ)” と言わんとしたのである。ところが，アブー・アル・サーイブは彼の言葉を気にもとめなかった。彼は浮かれて自分の頭を揺り動かした。それでガラス瓶は(振動で)ぶつかり合って，終には粉々に砕けてしまった。香油が，アブー・アル・サーイブの顔や背中と言わず胸にも流れ出した。彼は箱を下に置いて，彼女に言った。“(貴女はひどい人ですね。貴女の歌が余りにも見事なものだから，素晴らしい歌を聞くと浮かれ出すという) 私の古傷を，貴女は疼かせてしまいました”。

グライルは次のように語った。そして私達は，毎週2日間ずつ滞在しては，彼女の許に何年も通い詰めたものであった。

またグライルは次のように語った。その後，アル・アンダルスよりアブド・アル・ラフマーン・イブン・ムアーウィヤ・イブン・ヒシャーム ‘Abd al-Raḥmān ibn Mu‘āwīya ibn Hishām が人を遣わしてきた。アジュファーウはアブド・アル・ラフマーンのために買取られ，彼の許へと送られて行った」(注24)。

以上が，歌姫(jāriya)アジュファーウの東方におけるエピソードである。東方からアンダルシアへ赴いた後，アブド・アル・ラフマーン1世の宮廷での彼女の活躍振りは，残念ながら伝わっていないようである。いずれにせよアジュファーウは，仮に外見のために実際より老けて見えたとしても，東方にいた時に既に老婆(‘ajūz)と呼ばれるに相応しい年齢だったのであり，アンダルシアに渡った後それ程長く活躍できたとは考えられない。しかし，アル・イスバハーニーの『歌の書』にその逸話が見出される程であるから，アジュファーウが東方において歌姫として相当の知名度を有し，当然の事ながらその歌の技量には並々ならぬものがあつたに違いない。

ところで，上記のエピソードの示す場所であるが，定かではない。時代はウマイヤ朝末期かアッバース朝の初期であろうが，アッバース朝の初期と見なす方が自然であろう。彼女はその名が示す通り瘦細っており(‘ajfā’)，その当時既に相当な年齢に達していた。また，調度品や身なり容貌から判断する限り，その生活振りは決して恵まれておらず，惨めとも見える程であった。しかし，アジュファーウが一旦ウードを手にとって歌い始めると，その歌には清純さと純粹さがあふれて，まるで別人の如くに人を魅了してやまないものであった。因に，ウマイヤ朝からアッバース朝にかけて，「歌姫達は，その訓練のために特別に設けられた音楽学校の出身である事が普通であった。そして時に途方もない対価が支払われる事もあったが，その価格は肉体上と音楽上の魅力の相方により決定された」(注25)のである。アジュファーウも娘の時分に，ウマイヤ朝期の代表的女性歌手のジャミーラ Jamila (720年頃歿)のような著名な音楽家の許に預けられ，歌姫としての技芸，教養を磨いたに違いない。そして宮廷人や文化人のサロンで自慢ののどを聞かせて名声を博した事であろう。しかし，年を取ってその庇護者の寵愛を

失ったからか、或るいは他の事情に因るのかは分らぬが、恐らくは何度か入手に渡り、終にはこのエピソードが示すように酒売りのムスリム・イブン・ヤフヤーの所有するところとなってしまったと思われる。

ここで、アブド・アル・ラフマーン1世が何故年老いたアジュファウをわざわざアンダルシアの地に呼んだのかを考えてみたい。その理由はもちろん推測の域を出ないわけであるが、アンダルシアの宮廷における若い歌姫達の教育係という理由がまず挙げられよう。あるいは、アブド・アル・ラフマーンが東方にいた時分に寵愛していた歌姫の一人がアジュファウであったのかも知れない。恐らくは、その両方が理由かと思われる。何れにせよ、アジュファウはアブド・アル・ラフマーン1世の宮廷という晴やかな舞台で再びその美声を役立てる事ができたのであった。

さて、アジュファウの良き保護者であったアブド・アル・ラフマーン1世は788年にこの世を去り、その後を継いで2代目のアミール（君主）に即位したのは息子のヒシャーム1世 Hishām I（在位788—96年）であった。彼の治世は7年余りに過ぎなかったが、常に辺境区は不安定であり、ベルベル人の叛乱やキリスト教国との対立が続いた。ヒシャームの音楽に対する関心の程は伝えられていないが、公私共に敬虔なムスリム（イスラム教徒）として行動したようである。ヒシャームの治世に関してファーマーは、「宮廷においてマーリキー派の法学者の影響が大であった事から、音楽は禁じられていたかも知れない」^(註26)との見解を表明している。たとえファーマーの言う通りに、イスラム法解釈における4つの主要な法学派のうち、マーリク・イブン・アナス **Malik ibn Anas** (715—95年)を学祖とするマーリキー派がヒシャームの宮廷で多大の影響を持ったとしても、音楽文化に対するその影響の程は充分な検討を要すると思われる。成る程、マーリク・イブン・アナス自身は、歌を歌う事を禁じ、「女奴隷を買う場合に彼女が歌手である事がわかったら、彼女を返すのが義務である」^(註27)と考えていたに違いない。またマーリキー派を含め、「イスラムの4大法学派、すなわちハナフィー **Hanafi** 派、マーリキー **Maliki** 派、シャーフィイー **Shafi'i** 派、ハンバリー **Hanbali** 派は、多かれ少なかれ‘音楽を聞く事’に反対する決定を下した」^(註28)のも確かである。しかし、この‘音楽を聞く事’の合法性を巡っての論議は数百年にも及んだのである。加うるに、何と云っても音楽は人間性の自然の発露であり、いつの時代においても、またいかなる人種系統に属そうともこれを禁じ去る事は不可能なのである。アンダルシアにおいても、この興味深い実例を見出す事ができる。時代はヒシャーム1世の治世より大分下るとは思われるが、リベラはマーリキー派に属するコルドバのある法学者の例を引いて次の様に述べている。「これらの法学者達自身が、自らの妻がまさに自らの家の中に歌謡道場を設けるのを見届けざるを得なかったのである」^(註29)。従って、ヒシャームの敬虔さやその短い治世、またマーリキー派の影響力の大きさや宮廷音楽家の名前が文献中に見られない事等を考慮した場合、上記のファーマーの見解はヒシャーム1世の宮廷に関してはある程度妥当だろうが、一般民衆レベルまでその事を広げて考えるのは明らかに無理と思われる。

後ウマイヤ朝 3 代目アミール（君主）として、796年に父ヒシャームの後を継いだのはアル・ハカム 1 世（在位796—822年）であり、彼はその時26才の若さであった。アル・ハカムの四半世紀にも及ぶ長い治世も、彼の前任者達と同様に、再三の叛乱やキリスト教国との対立に終始したが、彼の目指したものは偏にアミールの権威の確立であった。彼はこの目的に対してあくまでも貪欲であった。アル・ハカムは時に強行で残酷とも思える手段にも訴えたが、彼が最後の息を引き取った時には彼が目指したものは概ね達成されたようである。アル・ハカムは文学やその他の芸術に対しても寛大であり、父のヒシャームの時代と違って、その宮廷には多数の音楽家が入り込んでいた。その中で著名な人物としては、東方からアンダルシアに赴いたアルーン 'Alūn とザルクーン Zarqūn, 宮廷の首席音楽家のアッバース・イブン・アル・ナサーイー 'Abbās ibn al-Nasā'i, そしてユダヤ人の音楽家マンスール al-Manṣūr 等が挙げられよう。

上記の音楽家達の中から、最初にアルーンとザルクーンを取り上げる。筆者が調べた限りでは、アル・イスバハーニーの『歌の書』には二人の名前は見いだされない。またリベラによれば、10世紀のアル・フシャニー al-Khushanī の著『アンダルシアの遺産より来るコルドバの裁判官達とイフリーキヤの法学者達 al-Qudā Qurṭuba wa 'ulamā' Ifriqiya min turāth al-Andalus』にもこの両者についての記載があるはずであるが、^(註30) 筆者が参照したカイロ版では、リベラが指示した個所にも、また巻末の索引中にも二人の名前を発見する事はできなかった。以下は、アル・マッカリーの『柔らかなアンダルシアの木枝』からの引用である。

「男性歌手 (mughannī) のうちで（東方イスラム世界より）アル・アンダルス al-Andalus（アンダルシア）に赴いた最初の者は、アルーン 'Alūn とザルクーン Zarqūn であった。二人はアル・ハカム・イブン・ヒシャーム al-Ḥakam ibn Hishām の時代に（アンダルシア）に到り、アル・ハカムのお気に入りとなった。彼等は共に（歌において）秀でていた。しかし二人の歌 (ghinā') は、ジルヤーブ Ziryāb の歌の勝利のために忘れ去られてしまった」^(註31)。

アルーンとザルクーンは東方からアンダルシアに赴いた音楽家のうちで、文献において確認できる最も初期の男性歌手である。しかし、この事は彼等より前に東方よりアンダルシアの地を踏んだ男性歌手がいなかったと言う事ではない。実際には、アル・ハカム 1 世の治世以前にも少なからぬ男性歌手がアンダルシアを訪れた事と思われる。リベラによれば、当時の教養人や重要人物の間では、自分達が礼遇したい人々に対して音楽のコンサートを催す習慣ができていた事から、アルーンとザルクーンの歌がスペイン人の間で流行となったそうである。^(註32) この事実からも、アル・ハカム 1 世の時代には、上層階級の間で音楽を中心としたサロンが広がっていた事が想像される。

アッバース・イブン・アル・ナサーイーは、リベラの『古代アラビアとスペインにおける音楽』にはその名前すら挙げられていない人物である。しかしファーマーの『アラビア音楽史』では、原典は示されていないものの、彼がアル・ハカム 1 世の宮廷における首席音楽家であ

り、アル・ハカムの詩歌の歌い手として言及されている。^(註33) ファーマーは『新オックスフォード音楽史』においてもアッバース・イブン・アル・ナサーイーの名を挙げているが、^(註34) ここでも原典資料は示されていない。筆者は、アル・イスバハーニーの『歌の書』のギディによる Index やアル・マッカリーの『柔らかきアンダルシアの木枝』のライデン版の索引にも当たったが、残念ながらそれと思しき人物を見出す事はできなかった。

さて、本稿で扱う時代よりは少し下るが、アル・ハカム 1 世の息子アブド・アル・ラフマーン 2 世（在位 822 年—52 年）の宮廷で活躍した歌姫（jāriya）のカラム Qalam は、イベリア半島の土着民の出身であり興味をそそられる。以下カラムについて、アル・マッカリーの『柔らかきアンダルシアの木枝』より引用する。

「カラムは、バスク人（Bashkunish）の捕虜（sabīy）出身のローマ（Rūmīya）系アンダルシア人であった。カラムは少女時代にマシュリク（Mashriq 東方イスラム世界）に送られ、預言者の町（Madina al-Nabī メディナの呼称）に過ごした。そして彼の地で歌（ghinā'）を習得し、それに精通した。またカラムは素晴らしい記憶力を有した教養人（adiba）で、能書家であり詩の語り手（rāwiya）でもあった。加えて歴史上の出来事（akhbār khabar の複数）の暗誦者（ḥafīza）であり、様々な形式の文学をも熟知していた」^(註35)。

カラムはイベリア半島の土着民の出身ではあったが、東方で教育を授けられている。そして単に歌だけでなく、その名 Qalam（筆、筆記の意）が示すように、アラブの伝統的学問に通じた教養人でもあった。彼女のように、土着の者が東方へ赴くのは決して珍しい事ではなかった。何と言っても東方はアンダルシアの人々にとって憧れの地であり、人々は巡礼のために東方へ向い、また学問を窮めるために彼の地でその道の先達に教えを請うたのである。音楽の面においても事態は同様であった。土着民の中でも才能や容貌に秀でた者は、幼い時に東方の大音楽家や音楽学校に託され、音楽家として必要な技量や教養を身に付けたのである。カラムが学んだのはメディナにおいてであったが、バグダードにも『千夜一夜物語 Alf laila wa laila』で有名な大音楽家のイブラーヒーム・アル・マウスイリー Ibrāhim al-Mauṣili（742—804 年）が所有する歌姫達の訓練のための音楽学校があり、彼女達は音楽ばかりでなく他の教養面においても高度な技芸を身につけていたのであった。^(註36) このように人々の志向は東方にあり、イスラム世界の各地から有名無名の数えきれぬ人々が東方へと向ったのである。

先にも触れたが、アル・ハカム 1 世の宮廷に任える男性歌手の中に、マンスールと名のるユダヤ人がいた。この人物の名が知られているのは、後にアンダルシアを代表する音楽家となったジルヤーブ（850 年頃歿）の一大転機に彼が関わったからである。師イスハーク・アル・マウスイリー Ishāq al-Mauṣili の妬みを買ったジルヤーブはバグダードを離れ、北アフリカ各地を経た後にアンダルシアの対岸に到った。ジルヤーブは、ジブラルタル海峡を渡る前にアンダルシアのアミール・アル・ハカム 1 世に手紙を送り、自分の才能を売り込んだ。それは功を奏し、彼ははいよいよ新天地に向けて船出したのである。以下の件りは、アル・マッカリーの『柔

らかきアンダルシアの木枝』より引用する。

「ジルヤブ Ziryāb は、彼の弟子達 ('iyāl) と子供達を伴って彼 (アル・ハカム 1 世) の許へと出かけた。彼は、ジブラルタル海峡 (Baḥr al-Zuqāq) を越えて緑色のアンダルシア (al-jazīra) へと船先を向けた。アンダルシアに落ち着く間もなく、すぐにアル・ハカムの死の知らせが彼の許にもたらされた。ジルヤブは、もと来た道を引き帰そうと考えた。その時ユダヤ人の男性歌手 (mughanni) マンスール Maṣṣūr がジルヤブに同行していたが、マンスールはジルヤブを迎えるために遣わされたアル・ハカムの使者であった。マンスールはジルヤブを説得して帰還する事を思い止め、アル・ハカムの代行の現支配者の許へ赴くようジルヤブを促した。その人物は、アル・ハカムの息子アブド・アル・ラフマーン 'Abd al-Raḥmān であった。マンスールはジルヤブの世評についてアブド・アル・ラフマーンに手紙を書き送った。そしてアブド・アル・ラフマーンの書状がジルヤブの許に届けられ、その中にはアブド・アル・ラフマーンがジルヤブに会見したい事、及びジルヤブが自分のもとに来てくれたら非常な喜びである旨が述べられていた。アブド・アル・ラフマーンはまたその地方を治めている長官達に通達を出し、ジルヤブに対する処遇に遺漏がないよう、またコルドバ Qurṭuba に到るまで護衛をするように命じた」(註37)。

マンスールが東方から赴いた可能性もあるが、イベリア半島にはアラブの征服以前より都市を中心にユダヤ人の集団が居住していた事から、マンスールも土着のユダヤ人であったと思われる。彼の名はジルヤブとの関わりの中でのみ言及されるため、宮廷音楽家として土着のユダヤ人がいた事は興味深い事実であるが、その詳細について述べる事はできない。ともかくも、この様にしてアンダルシアはジルヤブという一人の偉大な音楽家を東方から迎え入れ、アンダルシアの音楽は新しい時代の到来を告げる事になったのである。

4. お わ り に

以上の様に、時代的背景及び音楽的背景を踏まえて、後ウマイヤ朝創設期におけるアンダルシアのアラブ音楽について、その一端をかいま見てきた。しかし、本稿で扱ったのが宮廷を中心とした音楽文化に止まったため、民衆レベルの音楽活動を中心にして大きな欠落が存在している。この欠落を埋める事は、筆者にとって今後に残された非常に大きな課題である。なお、次回はジルヤブに焦点を当てて稿を練る予定である。 (本学附属図書館員)

注

(注1) イブン・ハルドゥーン：歴史序説(森本公誠訳・解説)，第2巻。岩波書店，1980年，p.856。

(注2) J. Ribera: Music in Ancient Arabia and Spain (tr. from Spanish by E. Hague and M. Leffingwell) New York, 1929/R 1970, p.99.

(注3) 前嶋信次：東西交通史料としてのアル・マッカリーの史書(『イスラム世界』，4) 日本イスラム

協会, 1965年。

(注4) W.M. ワット: イスラーム・スペイン史 (黒田・柏木訳) 岩波書店, 1976年, p. 90.

(注5) 同書: p. 80.

(注6) 同書: pp. 67—68.

(注7) J.B. トレンド: スペイン文明史 (丹羽光男訳) みすず書房, 1970年, p. 32, 参照。

(注8) 歌と詩の関係について本稿では, 「ジャーヒリーヤ歌謡の特質としては同じ口誦的, 聴覚的類似要素を持つ詩が余り豊かに成熟しきった形で誕生し, 一般化したために歌謡の自然的発展が阻害され, 独立の領域を持てず詩に従属したものであって, 大体において詩になされる鑑賞, 評価全般が歌, 音楽のそれにも流用せられていたと思われる」(堀内勝: ジャーヒリーヤ文化の一考察, 『イスラム世界』, 第9号, 1973年, p. 42) との見解に従っている。因に, ジャーヒリーヤ時代においては, 詩の朗誦 (inshād) は日常的であった。

(注9) H. G. Farmer: A History of Arabian Music to the Thirteenth Century. London, 1929/R 1973, p. 11, 脚注4.

(注10) 堀内勝: 都市の宴と歌の世界 (『東方の輝き』, 世界の女性史13) 評論社, 昭和52年, p. 244.

(注11) キラーアの歌謡性, 口誦性については, 堀内勝氏の以下の諸論文で詳細に論じられている。

1. QIRĀ'AH (コーランの読誦) に関するノート. アジア・アフリカ言語文化研究 4, 1971.
2. QIRĀ'AH (コーランの読誦) の文末機能に関するノート. アジア・アフリカ言語文化研究 5.
3. 『コーラン』の口誦的性格について. アラビア研究論叢, 昭和51年.

(注12) →注9, p. 98, 参照。

(注13) →注2, p. 99, 参照。

(注14) al-Maqqarī: Kitāb nafḥ al-ṭīb min ghuṣn al-Andalus al-raṭīb wa dhikr wazīrihā Lisān al-Dīn ibn al-Khaṭīb. Leiden, 1855—61, vol. 2, pp. 97—98.

(注15) アルカミー Arqamī という読み方は, ギディの Index (pp. 367, 627) に従った。I. Guidi (ed.): Tables alphabétiques du Kitāb al-Aghānī. Leiden, 1900.

(注16) アル・ジャッバーナ (al-jabbāna) が何を指すのかについてギディの Index にも当たったが, ちょうど該当するものは無いようである。筆者はどこかの町の区画を指すものと解し, ジャッバーナ地区と訳出した。

(注17) 靱皮繊維とは, 樹木の外皮の下にある柔らかな内皮部の繊維の事を言う。原注に拠れば, 羽毛 (rish) となっている写本もある。

(注18) 定かではないが, ウマイヤ朝カリフのヒシャーム (在位 724—43年) を指しているのかも知れない。

(注19) アル・ガリード (上手な歌手の意。716年頃歿) はベルベル出身のマウラー (解放奴隷) で, ナウフ (悲歌) を得意とし, メッカの他, ダマスカスのワリード1世 al-Walid I (在位705—15年) の宮廷でも活躍した。

(注20) 原文では, 子音 ṣād がファトハ (faṭḥa) 読みの binṣar と表記されていた。しかし, Hava や Steingass の辞典にも見当たらず, またファーマーも binṣir を用いている (例えば『アラビア音楽史』, pp. 52, 71, 72 を参照) ことから, ここでは binṣir とカスラ (kasra) 読みに従った。

- (注21) イスハーク・アル・マウスイリー Ishāq al-Mauṣilī (767—850年) を指すと思われる。イブラーヒーム・アル・マウスイリー Ibrāhīm al-Mauṣilī (742—804年) の息子で、父親のイブラーヒームと同様にマシュリク(東方イスラム世界)が生んだ最も著名な音楽家の一人である。イスハークは声楽や器楽の実践面ばかりでなく、楽理においても偉大な足跡を印し、またアラブの伝統的諸学問にも通じた八宗兼学の人であった。
- (注22) この〔 〕の部分は、アル・マッカリーのライデン版(注14を参照)により筆者が補った。
- (注23) ジャーリヤ(jāriya)は少女、女奴隷、女中などの意で用いられるが、本稿では全て歌姫として訳出した。
- (注24) al-Iṣbahānī : Kitāb al-aghānī, vol. 24. Cairo, 1974, pp. 131—134.
- (注25) H.G. Farmer: The Music of Islam (The New Oxford History of Music, vol. 1) London, 1957, p. 435.
- (注26) →注 9, p. 98.
- (注27) →注 9, p. 29.
- (注28) →注 25, p. 427.
- (注29) →注 2, p. 98.
- (注30) →注 2, p. 99, 参照。
- (注31) →注14, vol. 2, pp. 89—90.
- (注32) →注 2, p. 99, 参照。
- (注33) →注 9, p. 131, 参照。
- (注34) →注25, p. 429, 参照。
- (注35) →注14, vol. 2, pp. 96—97.
- (注36) →注 9, p. 102, 参照。
- (注37) →注14, vol. 2, p. 85.

引用及び参考文献

- al-Iṣbahānī : Kitāb al-aghānī. Cairo, 1927—.
- al-Maqqarī : Kitāb nafḥ al-ṭīb min ghuṣn al-Andalus al-raṭīb wa dhikr wazīrihā Lisān al-Dīn ibn al-Khaṭīb, 2 vols. Leiden, 1855—61.
- : Nafḥ al-ṭīb min ghuṣn al-Andalus al-raṭīb wa dhikr wazīrihā Lisān al-Dīn ibn al-Khaṭīb, 10 vols. Cairo, 1949.
- I. Guidi(ed.): Tables alphabétiques du Kitāb al-Aghānī. Leiden, 1900.
- A. Shiloah: The Theory of Music in Arabic Writings (RISM) München, 1979.
- 前嶋信次: 東西交通史料としてのアル・マッカリーの史書(『イスラム世界』, 4) 日本イスラム協会, 1965年。
- イブン・ハルドゥーン: 歴史序説(森本公誠訳・解説), 1—2巻。岩波書店, 1979—80年。
- : イブン・ハルドゥーンの「歴史序説」(田村実造編), 全2巻。アジア経済研究所, 1964—5年。

- H. G. Farmer: *A History of Arabian Music to the Thirteenth Century*. London, 1929/R 1973.
- : *The Music of Islam* (*The New Oxford History of Music*, vol. 1) London, 1957.
- : *Historical Facts for the Arabian Musical Influence*. Hildesheim, 1930/R 1970.
- J. Ribera : *Music in Ancient Arabia and Spain* (tr. from Spanish by E. Hague and M. Leffingwell) New York, 1929/R 1970.
- : *Historia de la música árabe medieval y su influencia en la española*. New York, 1927/R 1975.
- E. Neubauer : *Musiker am Hof der frühen 'Abbāsiden*. Frankfurt am Main, 1965.
- S. el Mahdi : *La musique arabe*. Paris, 1972.
- A. Salazar : *La música de España*, 2vols. Madrid, 1953.
- J. B. Trend : *The Music of Spanish History to 1600*. New York, 1926/R 1974.
- J. Porte (ed.) : *Musique musulmane* (*Encyclopédie des musiques sacrées*, vol. I) Paris, 1968.
- S. Sadie (ed.) : *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 20vols. London, 1980.
- 堀内 勝 : ジャーヒーリーヤ文化の一考察 (『イスラム世界』, 第 9 号) 日本イスラム協会, 1973年。
- 板垣雄三編 : 東方の輝き (世界の女性史13) 評論社, 昭和52年。
- J. スピラ : スペイン音楽 (浜田滋郎訳) 白水社, 1961年。
- G. チェイス : スペイン音楽史 (館野清恵訳) 全音楽譜出版社, 昭和49年。
- 岸辺成雄 : 音楽の西流。音楽之友社, 昭和27年。
- 飯田忠純 : 西洋音楽史概説。音楽世界社, 昭和12年。
- E. W. レイン : エジプトの生活 (大場正史訳) 桃源社, 昭和39年。
- T. Burckhardt: *Die maurische Kultur in Spanien*. München, 1980.
- J. Schacht, C. E. Bosworth (eds.) : *The Legacy of Islam*, 2nd ed. London, 1974.
- G. Jackson: *The Making of Medieval Spain*. New York, 1972.
- H. Terrasse: *Islam d'Espagne*. Paris, 1958.
- E. Lévi-Provençal : *Histoire de l'Espagne musulmane*, I. Paris, 1950.
- The Encyclopaedia of Islam*, new ed. Leiden, 1960—.
- W. M. ワット : イスラーム・スペイン史 (黒田・柏木訳) 岩波書店, 1976年。
- 前嶋信次 : イスラムの蔭に (生活の世界歴史 7) 河出書房新社, 昭和50年。
- J. B. トレンド : スペイン文明史 (丹羽光男訳) みすず書房, 1970年。
- F. ガブリエリ : マホメットとアラブの大征服 (矢島文夫訳) 平凡社, 昭和46年。
- 嶋田襄平 : イスラムの国家と社会。岩波書店, 1977年。
- : イスラム教史 (世界宗教史叢書 5) 山川出版社, 1978年。
- 中村廣治郎 : イスラム—思想と歴史。東京大学出版会, 1977年。
- B. ルイス : アラブの歴史 (林・山上訳) みすず書房, 1967年。
- 岩波講座・世界歴史, 8, 西アジア世界。岩波書店, 1969年。